

5月27日と6月5日

この国の歴史で、5月27日と6月5日に何が起きたか、直ぐに答えられる人は多くはないかもしれない。とくに、50歳以下の人たちには難しいのではないだろうか。

1905年(明治38年)5月27日は日本海海戦があった日だ。この日、当時の世界の中心ヨーロッパから遠く離れた、極東の小国日本が30年ほどの間に築きあげた連合艦隊は、強国ロシアのバルチック艦隊を撃破して、海戦史上稀な大勝利を収めた。その結果、Imperial Japanese NavyとAdmiral Togoの名は一躍世界に知られることとなり、日本は列強の一角を占めるに至った。

それから37年後の1942年(昭和17年)6月5日は、太平洋戦争のターニングポイントとなったミッドウェー海戦が行われた日だ。この海戦で、帝国海軍機動部隊は空母4隻(+全艦載機)と重巡洋艦1隻を一挙に失い、それから約3年後の終戦の日まで、その痛手から立ち直ることはなかった。

大勝を得た5月27日と大敗を喫した6月5日が暦の上で接近していることは偶然に過ぎないが、戦いの帰趨は微妙な要因に左右され、勝敗は背中合わせのものであることを暗示しているようでもある。日米間の国力の差から見て、太平洋戦争での日本の敗北は動かなかっただろうが、ミッドウェー海戦に限れば、帝国海軍が勝てた可能性はあった。当時アメリカ海軍は急速に力を付けつつあったが、質量ともに圧倒的に優

勢になったのは、ミッドウェー以後だったのだ。

実際、ミッドウェーで戦った帝国海軍とアメリカ海軍の士官、下士官、水兵の多くが、国籍は異なっても個人として意外によく似た面を持っていた。戦前には、日本だけでなくアメリカにも貧しい家庭が多く、その子弟たちで優秀な者は金のかからない海軍兵学校や陸軍士官学校に入学して、士官になる道を選んだ。また、志願して海軍に入った若者も多く、そのなかから下士官になった者が出た。このことは、作家澤地久枝の著書「滄海よ眠れ」を読めば、よくわかることだ。この本は1980年代の初めに出版されたものだが、それに至るまで、この著者は、女性ならではのユニークな視点に立って、念入りに事実を収集し、日米双方の戦没者多数の遺族に対してインタビューを行った。その執念は驚くべきものであったが、その結果、戦争というものが日米両国の戦没者遺族に及ぼした大きな影響が明らかにされたのだ。この本の内容と戦後から現在に至る両国の関係を見ると、太平洋戦争というものは一体何だったのかという思いが自然に出てくるのだ。

アメリカでは、5月の最終月曜日を Memorial Day と呼んで、戦没将兵追悼記念日としている。これは、南北戦争のあとで設けられたものらしいが、今ではアメリカが関わった全ての戦争での戦没将兵を対象としている。しかし、実際には、ビーチに行ったり、バーベキューをしたり、野球を

楽しむだけの日になっているので、それで良いのかという意見を最近 Washington Post 紙に掲載した評論家が居た。

これは少々危険な感想だと自分でも思いながら、これを書いている。（おわり）

この評論家によると、Geoffrey Perrett という歴史家が、第2次世界大戦は結果として真の社会革命というべきものをもたらしたと言っているそうだ。長い間存在していた、社会的経済的不平等がなくなり、真の中産階級が生まれ、誰でも高等教育を受けられるようになった。公民権運動が進展し、所得の再配分が行われるようになった。このような社会革命は、アメリカでは南北戦争の後でも起きた。第2次大戦以後の戦争として、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争があり、現在進行中のものとして、アフガニスタンとイラクでの戦争がある。Perrett は、これらの戦争の影響はさほど大きくないと考えているらしい。本当にそうなのだろうか？

日本で社会革命をもたらした戦争というと、戊申戦争、日露戦争、太平洋戦争が挙げられるだろう。なかでも、太平洋戦争は総力戦であり、しかも敗戦に終わったのだから、社会革命を伴ったことは当然だった。しかし、その社会革命は内発性のもものではなかった面がある。たとえば、農地解放という極めて重要な政治・経済上の措置は占領政策の一環として行われたもので、日本政府が主導したものではなかった。新憲法がマッカーサーの総司令部に押しつけられたものかどうかということもしばしば問題になってきた。

とはいえ、太平洋戦争あるいは第2次世界大戦後、戦勝国のアメリカ、イギリスなどだけでなく、敗戦国の日本、ドイツ、イタリアでも社会革命が進行したことは明らかである。では、今後はどうなるのだろうか？ 日本は、憲法で戦争をしないことを決めている国である。戦争放棄は理念として素晴らしい。しかし、歴史的事実として、戦争が社会革命の契機であったことを認めると、日本という国は、これからは何をもって社会革命の契機とするのだろうか？